



# みち 古道が紡ぐ物語



## 神武天皇東征の道②（吉野・熊野山岳地帯踏破）

熊野に上陸した神武天皇一行をヤマトまで案内したのが、熊野大神の使いであり、日本サッカー協会のシンボルともなっている八咫鳥である。高皇産靈尊（やたらす たかみむすびのみこと かいびやく天地開闢の際の神々の一神）の曾孫である賀茂建角身命（かも たけつのみのみこと）の化身とされ、その後の賀茂氏（賀茂県主）の始祖である。咫は長さの単位で、親指と中指を広げた長さ（約18cm）を指すが、この八咫は単に数量の多さを表す「八」である。

ただ、険しい山岳地帯を踏破し吉野、宇陀に到達したルートははっきりせず、地元に残る伝承や神社の社伝に依ることとなり、また、伊勢方面からヤマト入りを果たしたという説も興味深い。

### 玉置山から大台ヶ原越えへ

古事記と日本書紀では熊野からヤマト到着時の記述が異なるが、いずれにせよ、その途中の山岳地帯行軍の経路は不明で伝承に依ることとなる。

神武天皇一行は、熊野本宮に立ち寄った後、玉置山（奈良県十津川村）に登ったと伝わる。ここで、「十種神宝」の「玉」を鎮め戦勝祈願をしたことが玉置の名前の由来といわれ、第10代崇神天皇の御代には「玉置神社」が創建された。

玉置山から北方の山岳地帯を眺めると、「大峯奥駈道」を形成する尾根を始めとして、幾重にも峰々が連なる。ただ、「大峯奥駈道」は近畿最高峰「八経ヶ岳」（標高1,915m）などの急峻な山々を行く道で、傷病者を抱えての行軍には適さない。

地元の伝承では、吉野郡下北山村上桑原に神武天皇が立ち寄ったとされる。大台ヶ原に発し熊野川に合流する北山川沿いの集落であるが、ここから上流に向かうと、上北山村河合に薬師湯（上北山温泉）がある。神武天皇がこの温泉を発見し、傷病兵の湯治をしたほか、近くの「天皇塚」には戦病死者を葬ったとする伝承が残る。

この北東面にそびえるのが日本一の多雨地帯で、秘境とされた「大台ヶ原」である。隆起準平原と呼ばれる地形で、平原が地殻変動で隆起しさらに長年にかけて浸食され深い溪谷を刻んだもので、天気の良い日には吉野の山々や熊野灘方面を見渡すことができる。伝承では、神武天皇が国見をした所といわれ、山上の「牛石ヶ原」には、明治期



熊野三山の奥の院「玉置神社」

玉置山から吉野方面を望む。彼方にかすむのが下北山や大峰山系の山々。



神武天皇の伝承が残る薬師湯（上北山温泉）

に神武天皇の銅像が建立されている。

### もう一つの上陸地点

神武天皇の紀伊半島上陸地点として、最も多くの伝承を残すのが前月号で紹介した「二木島」であるが、他の伝承では、やや北にある「錦浦」（三重県大紀町）に上陸し、「大内山」（同町）から「三瀬谷の佐原」（大台町）へ進軍したとする伝承も残る。ちょうどヤマトの東方で、伊勢方面からの日を背負う方角である。

そこで一行は2つに分かれ、1隊は西方へ宮川をさかのぼりヤマトの宇陀を目指し、1隊は尾張などからの援軍を待って櫛田川沿いで合流した。

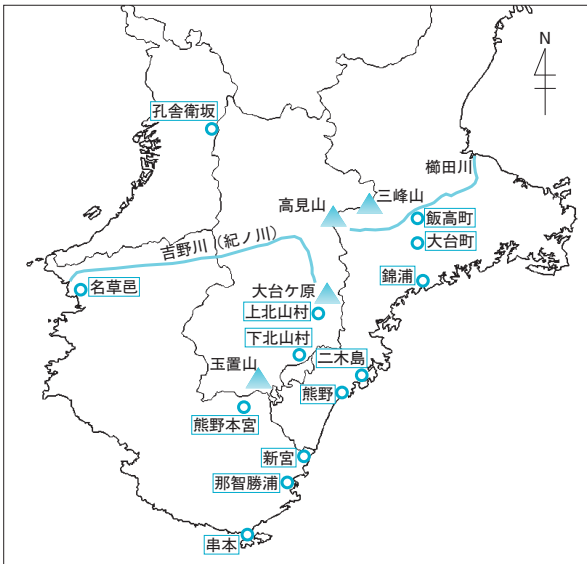


三峰山から台高山脈方面を望む。左奥の三角形の頂が「高見山」。



月出の中央構造線露頭。日本海側と太平洋側の変成岩層がぶつかる。(点線部)

### 紀伊半島地図



大台ヶ原から続く台高山脈の北端にあたる「高見山」<sup>みうねやま</sup>の麓で、後世には大和と伊勢を結ぶ「伊勢南街道」に沿っての行軍である。

古代から「錦浦」は穏やかな入り江で、ヤマトなどの内陸部への道もある交通の要衝であったとされる。最も円滑にヤマト入りができ、また、熊野で尾張氏の始祖「高倉下命」<sup>たかくらしのみこと</sup>が勢力に加わっているとも考えられることからあり得る話である。

### 中央構造線と神武天皇進軍行程

「三峰山」の麓、三重県飯高町には、神武天皇が行軍の際、山にかかる月を愛でて、この里を月出と名付けよとおっしゃったという伝承がある。

その「月出」の集落であるが、1959年の伊勢湾台風に伴う崖崩れによって中央構造線露頭が現れ、2002年には国の天然記念物に指定されている。

中央構造線とは、日本列島を関東-中部-近畿-四国-九州まで縦断する巨大断層であり、水銀や銅、鉄などの金属鉱床が豊富で、また、伊勢神宮、諏訪大社、鹿島神宮、香取神宮など大規模な神社が並ぶのも偶然とは言い切れない。

近畿では、櫛田川、吉野川（紀ノ川）の流域であるが、紀ノ川河口で神武軍が戦った名草戸<sup>なぐさのへ</sup>の勢力も水銀とは関わりが深い。記紀には表れないが、紀ノ川流域に「丹生都比売命」<sup>にうつひめのみこと</sup>を祀る水銀採掘の一族があり、名草とも血縁関係があった。「丹生都比売神社」（和歌山県かつらぎ町）は全国約180社の丹生都比売神を祀る神社の総本社で、その多くは中央構造線上に位置する。

丹生とは水銀を表すが、鮮血色をした丹土（辰砂などの水銀化合物）として採掘され、赤色の染色に珍重されるほか、金の精錬にも必要なことから古代より重要な金属で、国内はもとより中国からも欲しがられた。

天照大神と丹生都比売命は姉妹とされ、神武天皇とは本来同族であるが、時を経て忘れ去られていたのであろうか。神武軍が、地形的に楽な紀ノ川沿いの進軍を阻まれた要因ともみられる。

櫛田川流域も水銀鉱床地帯で、東大寺大仏建立時には金鍍金用に多量の水銀を献上した。ここでは、神武軍は平和的に迎えられているが、当時は、水銀脈が未発見であったのかもしれない。

いずれにせよ、神武天皇東征の経路には水銀等の金属鉱床の関わりが頻繁にみられており、神武天皇一行は、金属鉱床の探査・発掘や精錬等の先端的な技術力を持つことで、小勢力ながら後の大王家になったとも考えられる。

神武天皇説話は、何人かの大王の事績をまとめたものではないかとの見方もされるが、各説話は当時の日本の状況を語るものとして興味深い。

(続く) (山城 満)